**大野亀**

大野亀は、佐渡島の北端近くの海に突き出た巨大な岩石である。この岬の一枚岩は、海面から167メートルも隆起した巨大なドレライト（粗粒玄武岩）である。この種の地形としては佐渡最大のものである。観光客は隣接する公園からその側面を眺めたり、頂上まで未舗装の道をハイキングして（約30分の道のり）海岸線と周囲の海を一望したりすることができる。大野亀の麓からは、近くの崖に沿って、比較的難易度の低い遊歩道が整備されている。

大野亀は約2,000万年前に誕生した。地下に形成されたマグマのポケットが冷えて、地殻変動によって徐々に地表に押し上げられた。その後、火成岩は浸食によって徐々に露出し、何千年もの間、信仰の対象となってきた一枚岩を残した。大野亀という名前には「亀」という言葉が含まれているが、もともとは日本語の「神」またはアイヌ語の「カムイ」に由来しているのではないのかと考えられている。専門家の中には、佐渡の先史時代の住民は、本土の先住民族であるアイヌの人々とビーズなどの交易をしていたと考える人もおり、この岩の名前はその説を裏付けている。

大野亀の周辺は、5月下旬から6月上旬にかけて、斜面に黄橙色のカンゾウ（Hemerocallis middendorffii var.）が咲き乱れることで知られている。毎年6月の第2日曜日に開催される佐渡カンゾウ祭りでは、民謡や鬼の面をかぶった芸人たちによる鬼太鼓や踊りが披露される。